

## 中学校・高等学校家庭科教員の生活と意識

○高野良子\* 飯塚和子\*\* 高部和子\*\*\*

日女大・院\* お茶女大・院\*\* 大妻女大\*\*\*

**目的：** 今日、家庭科の存在意義や目的が再認識されている。本研究は、教育の場で家庭科教育を担当している女性教員が、どのような教職観や生活意識を持ち、職業生活を送っているかを明らかにすることを主目的としている。あわせて、女性教員の抱える共通の問題や課題を探ろうとするものである。

**方法：** 郵送による無記名自記式質問紙調査。調査時期は 1998 年 6 月～7 月。調査対象は全国の公立中学校家庭科主任 285 名、全国の高等学校家庭科教員 285 名。有効回答数 290。(回収率 50.9%)

**結果：** 分析の結果、以下のようなことが明らかになった。①家庭科教員も未婚化・晩婚化・少子化傾向の流れの中にある。②生活的・経済的には高い自立意識を持ちながらも、「家事や育児は女性の役割」という伝統的な性役割の神話から脱却できていない矛盾を内包している。③職業継続上の 2 大危機は、育児期と体調不良期であった。これは②で明らかにされた家庭科教員が内包する性役割への責任感とそれを実践する担い手であることが背景にあると考えられる。④家庭科が他の教科と同等の扱いを受けていないと感じている教員たちが多かった。⑤総じて生活の満足度は極めて高いものの、職場への不満は「家庭科の扱い」「労働条件や環境」に集中した。これらは④や家庭科の授業の内容とも関わっており、特に男女必修後のカリキュラム編成や教員の配置と強い関連があると考えられる。以上の結果から、家庭科教員においては大学教育段階も含めて、教員としてのアイデンティティをいかに形成するかが教職を継続する上で重要な課題であることが指摘される。